

『住山記』を読み解く

鶴見大学仏教文化研究所研究員 尾崎 正善

總持寺にある『住山記』の資料的価値と今後の活用方法と課題についてお話します。お手元の資料に記載の数値は作業途中なので正確ではありません。現在、エクセルに巻一から巻百四十までデータ入力いたしました。ただし、巻百三十四が欠本になっています。なお、校正作業が大変です。特に異体字の統一が大変な作業です。現在、索引を考えて統一することを検討しています。

また、地名も派名も表記が異なる場合があります。たとえば、寒岩派と法王派は同一派ですが、派名の表記が違います。

平成二十三年は、本山の御移転百周年に当たります。これを記念して總持寺から出版の準備をしている段階です。まず、資料一、「記載内容にみる資料価値」です。百四十巻ありますが、巻百三十四が欠本です。いつ頃欠本になったのかわかりませんが、『總持寺史』が発刊された昭和四十年の時点でないので、戦前か戦後すぐになくなったのだらうと思います。記載される期間は、慶応・明治の初期の頃なので、見たいところです。

人名の表記は基本的に二字です。資料をご覧ください。「泰玄」は瑞世師です。本山に瑞世で上がった人です。

「三万五千六百二世」は世代番号です。「通幻派」とあります。派は派閥と同じで系統を示します。「長林寺」という名刹の寺名があります。「文化五年」、そして干支があつて、「十月三日」、「受業師歩舜和尚」、「嗣法師歩舜和尚」、「上野之」、「従僧也」と記載されています。「上野之」は記載ミスの例で、実際には下野の寺院です。こういう形で名簿が書かれています。

人物名二字表記が基本ですが、瑩山紹瑾と四文字や瑩山瑾と三文字の例もあります。「道号・法諱」が書かれる例もあります。瑩山が道号、紹瑾が法諱です。法諱の二文字が多いのですが、道号が書かれている場合がたまにあるので、読み解くには注意が必要です。

瑞世の意味に関しては、日本地図と『住山記』の写真、裏面に語彙の説明がある資料をご覧ください。瑞世は、本山の出世道場に住職になることです。一日に最大四十七名の記録が紹介されました。現在も瑞世の制度はあり、私も總持寺と永平寺に瑞世に行きました。私の時、永平寺では四人でした。四人でも多く、總持寺では私一人でした。大祖堂の広い中でぼつんという、寂しいものでした。法要に一回出るだけの形式的なものです。当時もそれに近かったようです。

第一世の瑩山禪師から五万一千九百八十四世まで、世代数では、五万一千三百十六になります。世代と世代数とが異なるのは、重複や欠番、さらに巻百三十四がないからです。同じ番号の重複は最大五十件です。百番まで来たらいきなり五十一番に戻るというパターンがあるからです。

手書きなのでどうしても書き間違いが出ます。十番違ふとか、一番重なるとかは頻繁に見られます。それは同じ番号を二回書く例です。逆に欠番と言うと、一つ番号を飛ばすのです。

欠番の最多の例は、八十番、番号が飛びます。つまり、百番の次が百八十一番になってしまうというものです。

四万いくつという数を書いていくと、そういう間違いが出てきます。

さらに世代番号のみで氏名がない例もあります。推測ですが、浄書する前の古い本が傷んでいて書ききれなかったのかもしれませんが。最初のころは、上山した人が自分で書くので、書体が全部違います。Aの人が書くときはBの人が書く。それがまとまってくると最後は、一冊に、約四百名から五百名ありますが、それを二人から三人ぐらいで全部書き写すことになります。ですから、原本がすでにおかしかったのだと思います。

以上のようなので、瑞世師で名前の挙がる者は、さらに少なくとも五万一千二百四名となるのです。

受業師は、出家の時の師、お坊さんになる時の師匠のことです。この名前が挙がるのが、五万五百八十八名です。嗣法師は、法を嗣いだ、お前に俺の法を伝えるよと、卒業証書を渡してくれた師匠のことですが、それが五万八百九十五名です。このように、差があるのは、それぞれに名前が書いてあったりそうでなかったりする人がいるからです。合計の延べ人数は、十五万二千六百八十七名です。受業師や嗣法師は重複する場合があるので、人数は約十万人から十一万まで行かないくらいだと思います。

さらに、上山した年月日があはつきりわかります。未記入もありますが、その前後からほぼ時代は特定できます。その坊さんが何歳で上がったか、また、出家してからの年齢を法臘といいますが、法臘何年で上がったかはわかりませんので、その人の生涯までは確定することはできません。

出身の寺の名前が記されるのは、四万七千二十七件です。寺名は初期のものと明治以降のものには少ないです。ほとんど書かれていない時代があるので、件数は減ります。一つの寺院から何回も挙がる場合があるので、これも延べの数です。

地域名ですが、国名を記すものは四万八千七百十八件あります。問題は、国名の表記の内容と具体的な場所です。

奥州や羽州という書き方と、津軽、南部、仙台、秋田、庄内、仙北、鶴丘、鶴岡は、現在はこの漢字を使いませんが、こういう細かい表記のものもあります。

さらに、地域をどう限定するかという問題があります。常州と常陸、武州と武蔵は同じ国ですので問題はないのですが、江戸という表記も途中には見られます。尾州と尾張も同じ国名であっても表記が違います。さらに、野州は上野、上野は群馬県、下野は栃木県ですが、両方とも野州と書かれていて、どちらなのか特定できません。寺院には同名が多いのです。たとえば、観音寺は全国にたくさんあり、どの国か特定が難しい上に、さらにこういう地名の表記です。総州と書いてあると、上総と下総があり、九州の肥州は肥前と肥後の書き方をするので、どちらかわかりません。

派名があるのは、五万三百五十五件です。通玄派は二万五千八百十九件と約半分を占めます。資料に示した派を全部足しても五万件になりません。それは、表記が違う派や、細かい派のまとめ方がまだ決まっていないからです。およそ通玄派と太源派で大半を占めます。また、寒岩派と法王派は同じ寒岩義尹の系統です。このように派の名前を使い分けていますが、理由はわかりません。

再公文、成直、推拳状、推拳師、贈公文、褒命、遥受、これらはすべての巻に記載されていませんが、資料のうちに瑞世師の頭注部分にわざわざだし書きがしてあります。

『住山記』の特長をまとめます。曹洞宗の江戸期の展開を全国的に網羅できます。つまり、本山に瑞世で上がってきた僧の名簿だからです。永平寺・道正庵資料でも瑞世師がわかりますが、一部しか残っていません。永平寺の資料は、總持寺に二十八冊あります。圭室文雄先生が、今年出版した、『總持寺祖院古文書を読み解く』には、總持寺の『住山記』と永平寺の資料を比較しながら論考が加えられています。

さて、先に述べたように『住山記』では、瑞世した僧の名前および受業と嗣法の関係が明確になります。それだけの寺院には過去帳があり、世代名が載っています。しかし、歴住の任職がだれから受業したか、嗣法したかは、ほとんど書かれていません。私の寺の過去帳にも記載はありません。これがわかるのも本資料の特長です。

さらに活躍の年月日が明確で、寺院名、地域名、派が特定できるのです。

卑近な例ですが、五万人の卒業者名簿があるということです。誰の受業、嗣法であったか、さらに出身地、出身寺院がわかる貴重なデータです。一部、新潟県の寺院史を作った時、確認はしているようですが、今までこれが總持寺にあっても利用されることはほとんどありませんでした。

この資料により、火災で焼失した、特に空襲で焼かれて資料がない東京の寺院の記録も出てきます。曹洞宗の派の動向や、面受嗣法と伽藍法の相互関係についても再考できます。十方住持制でない一般の寺の場合は、度弟院制と言って一派の系統がつながっていきます。私もそう思っていたのですが、この『住山記』を見るとそうではないとわかってきました。

次は資料二、「研究の課題・可能性」です。時代毎の変化・推移を確認する例として、年代を十年毎に区切ると、瑞世の変化の特徴と問題点が明らかになります。一年毎に変化していることは、『總持寺史』や圭室文雄先生の本でも行っています。でも、それは数の変化のみで、地域や派の動向は考慮されていません。納富先生は岩手の正法寺の例を出されましたが、奥州や羽州、つまり東北地方から瑞世に来る人については、元々、總持寺は能登半島（石川県）にありましたので、東北、九州、武蔵国、相模国から徒歩でどれぐらいかかるかわからないので、瑞世師は少ないかと思っていたのです。つまり、瑞世師は、北陸が中心だと想像していたのですが、奥州や羽州出身者が非常に多いことがわかりました。

瑞世師の数を年代毎と地域や派を組み合わせてみるにより、意外な動向も見えてきます。羽州・奥州・薩摩などが意外と多いです。現在、鹿児島に曹洞宗の寺はほとんどありません。昔、薩摩には約二百の寺がありました。明治期の廃仏毀釈で十九にまで減りました。また、宮崎県（日向）にも曹洞宗の寺院は現在はありません。しかし、『住山記』では、薩摩・日向という記録が出てきます。幕末から明治初期にかけては、北海道からも瑞世に來ます。古くは松前藩、そしてそれ以外の記録も出てきます。

通幻派は、圧倒的多数派です。寒岩派は、永平寺の傾向が強いのですが、この人たちも上がってきます。法王派は、卷十一に、「法王手形有」という形で記載され、仲介者の取り次ぎで入ってきます。そうした派が、總持寺教団の中に取り込まれて瑞世することが、明らかになってきました。

先に述べたように受業師、嗣法師がわかるので、本末関係と嗣法関係の問題が明らかになります。本末というのは、親の寺院である本寺と、子どもの寺院である末寺との関係で成立しています。ところが、『住山記』では各住職の嗣法関係がわかりまから、寺院名から、同じ寺院の世代間で嗣法関係があったのか、もしくは、他の寺院の系統から嗣法されたのがわかるのです。

末寺から本寺へ住職が替わることもあります。瑞世の時点では、末寺の住職ですが、後に本寺の住職となる例です。

実際、末寺の歴代の住職名や相互の嗣法関係を把握したりする寺は多くはありません。『住山記』には、本寺の弟子が末寺の住職となる例もあります。弟子が末寺の住職になるなど、上下関係を確立、固定していくことも、受業師、嗣法師の関係がわかることで明らかになります。

長林寺（栃木足利の名刹）の例を挙げます。

卷三十二、一万八百三十九世可愼が元禄六年に總持寺に瑞世で上がっています。彼は無量寺の住職で、朔道から法を継ぎました。朔道は長林寺の十五世です。無量寺は長林寺の末寺です。ここで初めて可愼と長林寺の世代との関係が明らかになりました。

長林寺十八世禪龍も、朔道から受業して、徹運から嗣法しました。朔道は長林寺の十五世ですが、徹運は長林寺十六世の徹理の誤りかと思っています。さらに、瑞世の時の源光寺も長林寺の末寺です。

続く二十世知足の寺、大乘院も末寺です。末寺の住職の時に總持寺に上がって、戻ってきて長林寺に入るという、末寺で住職して瑞世し、箔をつけると上の寺に入る関係があります。長林寺二十六世覺玄の瑞世したときの長泰寺も末寺です。

このように本末関係のピラミッドを形作っています。過去帳がなくなっていますが、以上のように相互の嗣法関係・本末関係がわかってきます。

二十四世の泰玄は、地名が上野になっています。本来は栃木なので下野のはずです。書写間違いか、出身地が上野かの、どちらかとも考えられます。寺と地名が合わない場合もあり、今後の読み取りが課題です。

さて、次に五院と瑞世師の関係です。五院は、總持寺を守るための正式な住職を出す五つの寺のことです。瑞世師は總持寺に一日しかおらず、十二月から一月にかけては瑞世師はほとんど来ません。そこで五院が住職を出し、總持寺を通年で管理します。この人たちを確認すると、たとえば、輪住直前の瑞世があります。元禄十年に大春慧廣が五院に入っています。これを『住山記』で確認すると、卷三十五に「一万一千五百三十六世太春、元禄十年八月十日」とありますから、太春が輪住直前に瑞世をしているのが確認できます。

逆に五院輪住まで二十二年経た例もあります。寺名が違いますが、奥州仙台の松音院から五院に入っている人が

います。この人が瑞世をした時は、奥州の玉泉寺です。これは同門ですので間違いないと思います。また、五院輪住まで二十五年経た例もあります。松岩寺が本寺で、相州の長泉寺が末寺です。この人は、末寺で瑞世して、五院には本寺から入りました。こういう寺院を移った流れもわかります。納富先生の記録では、瑞世してから五院に上がるまでの最長期間は三十七年です。逆にひどい例は、五院の住持を終えてから瑞世をした記録もあります。本末転倒です。

次に同じ寺院でも住職の派が変わることも確認できました。尾張の泉洞寺という寺院は一カ寺しかありません。この寺の瑞世師だけを並べてみると、通玄派が続いて太源派に変わってきます。検索するとこういう例がいくつが出てくるのです。武蔵に下山寺があります。ここは通玄派が続いて太源派になりもう一回通玄派に戻ります。尾張の春養寺は、法王派、如意菴という五院の取り次ぎによって瑞世した住職と、その次は大徹派で、さらに通玄派で瑞世しました。このように、同じ寺院でも瑞世師の派名が変化しているのです。

さらに、同一の受業師と嗣法師が別の派名になるという例もあります。同じ受業師でも、嗣法の段階となれば別派になる場合は多いです。ところが、巻百二十二の例では五人の瑞世師の授業師・嗣法師が蟠龍、蟠龍、令麟、令麟、蟠龍、蟠龍と記されます。蟠龍と蟠龍の間に一つ令麟の弟子が入るのは、太源派が並ぶので問題はないのですが、この令麟の場合は三人、つまり、太敬、孝順、俊峰の弟子がいます。この三人の派名が、太源派、明峰派、通玄派となっています。

免許状を付与した時に、同じ人が卒業証書を渡しているのに、お前には太源派、お前には通玄派、お前には明峰派と使い分けしているというのです。

また首座・書記・都寺・上座からの嗣法もあります。首座は修行僧のトップです。住職のように寺のトップでな

い人から受業をする場合もあったのです。典座という食事係りの人から嗣法を受ける例もあります。

さて總持寺の非グループから瑞世するために仲介が必要でした。明峰派（永光寺の系統）は、總持寺に瑞世するためにわざわざ伝法庵または大徹派を取り次ぎました。

再公文は、再び許可状をもらうことです。永平寺に一度瑞世し、入る寺の関係で、免許状を再発行してもらうようなものです。「成直」もやり直しと同じです。遥授は、瑞世しないで済ませた例だと思います。

瑞世師の人数は、一日で最多の例は四十七人もいます。十二月、一月は雪の季節なので、瑞世は極端に少ないです。その他、多い日には傾向があるようです。今後、データ分析が進めばそうしたこともわかってくるでしょう。

細かいところでは、名前に使用する文字に、時代の変化が見られます。何時も見られる字や、前後半のいずれかだけにしか出てこない、特定の時代の好みの字もあります。

また、受業師と嗣法師が同じになるのも時代の変化によるようです。最初の頃は、受業と嗣法の師匠が違う例が多いですが、ある時代を境に同一の例が多くなります。こういう傾向も今後わかるのではないかと思います。

最後に今後の課題です。データの整理・編集は御移転記念誌を出す上でも、クリアすべき問題です。次に整理したデータの検索・集計の手順を構築する必要があります。各種統計の整理法にならって分析できればと思います。これらができれば、各寺院の寺史や地方史作成に寄与すること大だと思います。すでに廃寺となった寺院の記録も残っており、各寺院の世代に関する記録も、その寺以上に残っている可能性もあります。

先程述べたように永平寺の『住山記』は、一部ですが残っています。これもデータベース化して總持寺の記録と同時代のものをつき合わせることににより、永平寺と總持寺間での瑞世師の違いもわかると思います。

永平寺との比較の必要性は、相互の関係、瑞世の取り合いが明らかになるからです。

実は、瑞世は總持寺の大きな収入源でした。瑞世のお金は、当時五両でした。一両は現在のお金にして約十万円に相当します。

瑞世の後、京都に上がつて参内します。宮中に入って繪旨をもらうのです。このために必要なのがお金が五両です。さらに旅費、お礼も含め、合計すると約五十両を要します。これは約五百万円です。

永平寺、總持寺ともに一人五両ずつで、年間二百人くらい瑞世します。この人数を取り合うのです。年間二百人瑞世すれば、一千両になり、約一億円相当です。これが總持寺の主な運営資金になります。瑞世師の減少は死活問題です。ですから、ある時代には峨山派という總持寺系統の人は皆な總持寺に瑞世しなければいけない、という御触れを出します。

それで永平寺と論争も起こりました。こうした関係も、永平寺の記録と比較するとさらにわかるでしょうし、瑞世の実態や『住山記』の記録がより多角的に明らかになると思います。